



大阪公立大学共同出版会

No.35

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

- | | | | |
|--|--------------|---|---------------|
| • 第12回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告 | 1 | • 「脱知性時代」、「反知性主義」、「ポピュリズム」の
飛び交う中で読む | 足立 泰二 5 |
| • 自著を語る (21)
獣医学の狩人たち 20世紀の獣医偉人列伝 | 大竹 修 2 | • 第34回OMUPサロンの報告 | 6 |
| • 自著を語る (22)
デージーワールドと地球システム
—The Earth Systemの抄訳と編著者のノートから— | 能田 成 3 | • 大阪府立大学図書館にOMUPコーナー設置 | 6 |
| • 「読ン得本々」の執筆の先生方に聞く | 4 | • 大阪公立大学共同出版会事務局より | 6 |
| | | • 編集後記 | 6 |

第12回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告

6月24日（土）午前11時より11時50分まで大阪府立大学A14号棟2階会議室において、第12回NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）の総会が開催された。総会成立の確認後、足立泰二理事長を議長に選出し、さらに上田純一常務理事と中村治常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。

第1号議案「平成28年度事業報告」では、教育関係活動に力を注ぎ、「生物学実験への招待 大阪市立大学基礎生物学実験テキスト（S, A, Bコース）」や「双方向授業が拓く日本の教育 アクティブ・ラーニングへの期待」などを出版したことが報告された。またOMUPブックレットNo. 57, 58, 59, 60の出版やフランス語および日本語で書かれた書籍「Lettres à Madame A.」などの出版等を通じて、質の高い学術図書出版の向上にも努めたことなどが報告され、満場一致で承認された。

第2号議案「平成28年度事業決算」は、表に示す通りである。監事より「適法かつ正確である」と署名捺印をいただき、満場一致で承認された。

第3号議案「業務契約」については、電話秘書業務の委託契約、杉本公認会計士事務所との顧問契約、ホームページの維持・管理契約、事務局業務の契約、責任編集業務の委託契約のそれぞれについて、満場一致で承認された。

第4号議案「平成29年度事業計画」については、「NPO法人みやざき自然塾」との連携を保ちつつ、受託出版事業、出版物の受託販売事業を展開すること、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作成と配布、ニュースレターの発行（年間2回）、ホームページの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業を展開することが、満場一致で承認された。

第5号議案「平成29年度事業予算」については、表に示すような予算が提案され、満場一致で承認された。

(文責 中村 治)

平成28年度事業決算および平成29年度事業予算書

(単位：円)

科 目	H28年度 決算額	H29年度 予算額
事業収入		
書籍売上	4,852,067	5,250,000
出版収入	4,574,933	5,000,000
著者負担		
大学負担	1,397,432	1,250,000
出版助成等		
寄付金収入	0	0
入会金収入	110,000	100,000
その他の収入		
受取利息	14	10
雑収入	59,481	50,000
当期収入合計	10,993,927	11,650,010
売上原価		
期首商品棚卸	2,427,244	2,417,891
製作費	5,047,042	5,000,000
運送・発送費	127,734	150,000
編集デザイン料	514,186	500,000
期末商品棚卸	2,417,891	2,000,000
管理費		
雑給	3,052,847	3,100,000
福利厚生費	9,545	10,000
業務委託費	619,446	620,000
旅費交通費	514,865	500,000
通信費	82,318	100,000
交際費	6,000	10,000
寄付金	10,000	10,000
会議費	31,195	30,000
修繕費	0	20,000
水道光熱費	16,668	120,000
著者精算	626,568	500,000
消耗品費	27,952	30,000
租税公課	2,000	2,000
事務用品費	37,665	35,000
広告宣伝	10,638	20,000
支払手数料	278,643	300,000
法人税等	70,002	70,002
当期支出合計	11,094,667	11,544,893
当期取支差額	-100,740	105,117
前期繰越取支差額	3,807,426	3,706,686
次期繰越取支差額	3,706,686	3,811,803

自著を語る（21）

獣医学の狩人たち 20世紀の獣医偉人列伝

大竹 修 著



ISBN978-4-907209-72-8 C0023
A5判、並製本、412頁
定価：本体2,400円+税

日本一有名な偉人は誰だろうか？偉人伝的にはやはり野口英世博士であろう。

古くは、北里柴三郎博士や山極勝三郎博士などもノーベル賞にノミネートされたが、東洋の小国との偏見を持たれていた時代だったので実現しなかった。

その他に傑出した政治家、あるいは武将や文豪の伝記も読み漁ったが、それらの偉人伝の中で、獣医学者の伝記にはついぞ出会うことではなく、獣医学を学んだ者としては、いさか寂しい思いをしていた。

世界的な偉業を残した日本の獣医学者は大勢いる。しか

し、それらの誰一人として、世間に広く知られている人はいない。ここが人命を預かる医学学者との大きな違いなのであるが、獣医師も動物を通じて人類の健康と平和に貢献していることを、私は長年（小さな声で）言い続けてきた。

いつか誰かが出版してくれることを待ち望んでいた獣医偉人伝。しかしその時は一向にやって来ない。「それでは俺が」という気負った気持ちも、能力もさらさら持ち合わせてはいない。浅学菲才の凡夫の身であることは重々承知している。

こんな時に読んだのが、日本獣医史学雑誌に掲載された、高橋 貢先生の文章「獣医界不世出の偉人・越智勇一先生」であった。これをもう少し長文にすれば、書店の「野口英世博士伝」の横に並べられる獣医偉人伝になる、と一人興奮したことを覚えている。

後日、親交のある佐々木伸雄東京大学名誉教授から、越智先生の追憶集を借りて読む機会があった。この本を読みながら、なんとかして1万字程度の越智先生の評伝を、自分の力で作ってみようと思うようになり、その日からパソコンに向かい、キーボードを叩く日々が続いた。わが手で作った獣医偉人伝の第1作目は「越智勇一博士伝」であった。

評伝を作るためには、研究論文だけではなく、本人の経験や人となりに関する資料が必須である。多く集まるほど詳しい評伝が作れるのは当然であり、それからの私は自分の蔵書だけでは無理なことが分ったので、常々親交のある大学人や

書評（JVM獣医畜産新報 2017年7月号掲載）

Book review



獣医学の狩人たち、20世紀の獣医偉人列伝
大竹 修著

2017年5月・大阪公立大学共同出版会発行
価格（本体2,400円+税）

評者 東京大学名誉教授 佐々木 伸雄

本書は、明治期から昭和にかけて日本の獣医学の発展に多大な貢献をした、微生物分野の梅野信吉、越智勇一、平戸勝七先生等、解剖学分野の増井 清先生等、病理学分野の市川厚一、山際三郎先生等、寄生虫・内科学分野の板垣四郎、小野 豊先生等、外科学・麻酔学分野の松葉重雄、木全春生先生等など、卓越した日本の獣医師28名を選び、その研究や社会活動等を紹介したものである。著者は、iPS細胞の山中伸弥博士のノーベル賞受賞に触発され、医学に比較して獣医師の活躍を伝える書籍が圧倒的に少ないことを思い、明治期以降に日本の獣医学に貢献した人物に焦点を当て、資料を調べ始めたという。

獣医学に限らず明治期から戦前の日本社会における情報は少ない。敗戦後の日本においては、戦前の情報があまり顧みられて來なかつたためであろう。實際には、多くの先達者が多分野において有意義な研究を行っており、その教えは昭和世代に引き継がれ、現在の獣医学にも引き継がれている。もちろん、最近の獣医学の

進展は、医学同様凄まじいスピードで進行しており、戦前の研究成果の多くは過去のものかもしれない。しかし、それぞれの先達が、それぞれの時代にどのように考え、努力し、先進的な研究を行ってきたかを知ることの意義は大きい。

著者の大竹先生は牛の臨床家として多大な研究を行ってきた。先生の臨床に対する情熱は非常に熱く、その熱に触れて育ってきた若い獣医師も多い。大竹先生の文章は診療に対する熱意と同様に熱い。ここに取り上げられている各獣医師に対する思い入れが伝わってくる。きっとそれぞれの時代に努力してきた先達に対する敬意が込められているのであろう。

これらの列伝—偉人伝で取り上げられた獣医師に関する資料は乏しい。大竹先生は関連する多くの文献をあたり、また関係者に積極的に質問し、たくさんの情報を仕入れている。特に戦前の資料はかなりの部分紛失していたものと思われるが、少しずつそれらをたぐり寄せ、今回の列伝を著した。

数年前、獣医臨床関連の獣医師7名に関する列伝を記し、それが「家畜診療」に連載された。今回はさらに多くの先達に関して紹介されている。しかし、これで終了ではない。第2版にはさらに多くの先達に関する情報がもたらされるものと期待する。多くの若い獣医師、学生には是非一度本書を開き、日本の獣医学界における近代獣医学の発展を俯瞰すると同時に、それぞれの環境の中で如何に努力することが重要かを認識して欲しい。

学者に、関連資料の提供を依頼したところ、効果できめん、次々と資料が集まり始めた。

2012年に中山伸弥博士がiPS細胞の研究でノーベル医学・生理学賞を受賞されたことに触発されて始めた評伝作りは、約5年間続き、その間、本当に楽しく充実した時間を過ごすことができた。

作り上げた稚拙な文章は、資料提供者に送って読んでもらうことを常としたが、例外なく「素晴らしい、ぜひ獣医偉人伝として世に出してくれるよう」との温かい励ましをいただき、愈々天にも昇るような気持ちになった。

その気持ちが前進の原動力となり、最初は「趣味」で作り始めたのであるが、徐々に「作らなければ」との「責任」に変身した。

そこで佐々木先生や、元日本大学総長の酒井健夫名誉教授に相談したところ、作品のうちの、家畜に関連のある7名の臨床学者について獣医学術雑誌の「家畜診療」誌に連載していただけたことになった。

また、畏友、山根義久博士（公益財団法人動物臨床医学研究所理事長、日本獣医師会会長、東京農工大学教授）も、彼

が刊行している「動物臨床医学」誌に連載してやろうと、親切な手を差し伸べてくれた。

これまでには、1評伝が完成するたびに、長年親交を続いている浜名克己鹿児島大学名誉教授に送って批評していただいていた。熱心に背中を押し続けてくれ、単行本の出版を奨めてくれた浜名先生は、具体的な出版社まで探してくれた。

数年前までは途方もなく遠くて、夢のまた夢として夢見ていただけの私の想いは、浜名先生の強い後ろ盾によって、出版実現の方向へと前進して行った。

紹介されたOMUPでは、編集者の一人に浜名先生が加わり、2016年の年末から続けられた校正作業は、2017年3月末に終了した。浜名先生の手が入ったゲラは、とても洗練された読みやすい文体に変身した。

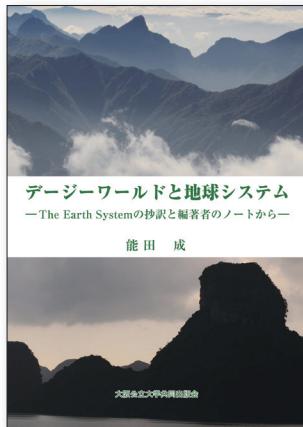
1字1句まで気配りし、用語の統一に専念し、小説やエッセイではない、そして堅苦しい科学論文でもないノンフィクション作品は、こうした経緯を経て完成を見た。

青空に鯉のぼりが泳ぐ5月1日に、「獣医学の狩人・20世紀の獣医偉人列伝」は発刊された。 (文責 大竹 修)

自著を語る（22）

デジーワールドと地球システム —The Earth Systemの抄訳と編著者のノートから—

能田 成 著



ISBN978-4-907209-66-7 C3044
A5判、並製本、168頁
定価：本体1,800円+税

抄訳の原本：The Earth System（以後TES）との出会いや特徴については、「あとがき」で述べた。それ以外の特徴としては、他の地球科学入門テキストはどれも図版が素晴らしい綺麗だが、TESのそれは図抜けて質素である。他の本では数式をほとんど見かけないが、TESには遠慮なく出てくる。各章末には復習問題と、相當に考えないと答えにたどり着けない練習問題がある、等であった。環境科学は総合科学であ

るから、この構成は個別基礎学力を検証するためによく考えられていると感心した。TESをベースに熊本での講義プリントを作り、練習問題を解くことは楽しみの一つであった。

近年、TESはいくつかの大学の講義のベースに使われたり、輪読の教材にしているところがあると聞く。それは誠に歓迎すべき傾向であるし、この点では私は断然バイオニアであったと、いささか鼻がたかい。気軽には読めないにしても、この本はもっと読まれるべきである。そして地球環境を考える若者たちへの良い刺激となってほしい。そういう願いを「デジーワールドと地球システム」に込めたつもりである。本来なら全訳といきたいところだが、紙数の制約や訳者の能力的都合もあり、このようなスタイルとなった。そのことでTESの良さが大幅に減少していないことを願うばかりである。

さて出来上がった本を手にしての感想：表紙と写真のデキが良い。これで本文もすべてオリジナルであれば、もっと良かった。自著というものは我が子のようなものとすれば、‘デキが良くないほど可愛い’ ものか。そんなことはあるまい。デキが良ければさらに可愛いに違いない。今のところ、溺愛するほどでもなく、冷たい親ではなく、存外冷静な親父である。

(文責 能田 成)

「読ン得本々」の執筆の先生方に聞く

2001年の大阪公立大学共同出版会（OMUP）発足以来、大阪市立大学、大阪府立大学および大阪女子大学の各生協の協賛で刊行されてきた『OMUP会員が新入生にすすめる本』は、2011年からは大阪府立大学学術情報センター、同大学生協、およびOMUPの共同企画・制作となり、大阪府立大学図書館委員会の先生方が学生に薦めるブックガイド『読ン得本々 各年版』として、新入生に配布される形に発展した。今回は、この『読ン得本々』の執筆者の先生方に、読書全般、そして本の出版などに対するご意見や思いを、OMUP編集担当者が伺った。

（インタビュー：OMUP編集 中村奈々 なお、日程の都合上、インタビューできなかった中村先生と山崎先生からはご寄稿いただいた。）



「進化」の正しい理解を 生命環境科学域 自然科学類 石原 道博 先生

OMUPでは、八木孝司先生編集『チョウの斑紋形成の生物学』の一部を執筆しました。当初は別の出版社から出す予定でしたが、カラー写真を多く掲載することがかなわず、それでOMUPから自費出版となりました。結果的に美しいチョウの写真をたくさん掲載できたのは幸いでした。『読ン得本々』で、長谷川真理子さんの『進化とはなんだろうか』を薦めたのは、学生に「進化」を正しく知ってもらいたいからです。一般に、「進化」と言う場合、「改良」や「向上」と誤ってとらえられています。生物学での「進化」は単に時間に伴う遺伝的な変化であり、「退化」も進化に含まれます。理系の場合、出版の業績はそれほど評価されませんが、一般に知識の普及を図るのも研究者の社会的貢献だと思います。



『西遊記』補作『鏡の国の孫悟空』の注釈 人間社会システム科学研究所 大平 桂一 先生

2002年に東洋文庫から、董若雨の『西遊補』を『鏡の国の孫悟空—西遊補』として、恩師と共に翻訳して出版しました。これは『西遊記』の「補作」ですが、実際に読めば、幻想物語です。そして、同書の「ですます」調を「である」調に改め、注釈を増補したものが、本学の『人文学論集』に何回かに分けて掲載された「西遊補訳注」です。これをまとめて出版するときにはOMUPにお願いするかもしれません。OMUPの出版物では、『ラテン詩人水野有庸の軌跡』（2009年、『ラテン詩人水野有庸の軌跡』編集委員会編著）が素晴らしい。一気に通読しました。退職したら東西の古典語をやるつもりです。



大学史編纂事業の構想 21世紀科学研究機構 山東 功 先生

2008年に設置された大学史編纂研究所（バーチャル）で、本学の大学史に関する調査研究を行っています。近い将来、本格的な大学史編纂事業を目指しています。2009年にはOMUPから『大学』を学ぶ—大阪府立大学史への誘い—を上梓しました。大学史にはさまざまな意味があります。学生が「こういう大学だったのか」と知ることに、地域や社会に大学の役割を報告することに、また今後は大学の広報としても寄与するでしょう。OMUPとは、大学の周年史をはじめとする出版で連携できるのではないかと思います。そうすることで、大学出版会としての特色も出していけるのではないかでしょうか。



教科書を疑うセンスが大事 生命環境科学研究所 杉本 憲治 先生

理系の本を出版する目的は、「活動していますよ」という実績を示すケースや、同系の研究者の、実験を再現するためのマニュアル的なものが欲しいという声に応える場合などがあります。後者では、読み手の知りたいことがわかります。もし書いたら面白いだろうと思うのは、科学の発見や実験のいきさつで、教科書には書かれない裏話的なもの。教科書に書かれていることを疑う、「変だな」と思うセンスは大事なので、それに呼応するような本です。活字関係の予定では、所長を務めている本学のライブセルイメージ研究所が、来年設立12年を迎えるので、12周年のパンフレットのような印刷物を作ることを考えています。



今こそ多読を 工学域 電気電子系学類 戸川 欣彦 先生

理系では、共同の研究プロジェクトを立ち上げて、研究成果の宣伝を兼ねて出版物を出すということはよくあります。でも、八木孝司先生の本（編著『チョウの斑紋形成の生物学』OMUP、2015）を読んだら、こういうものができるのだと思いました。『読ン得本々』では、1回生が対象ならばと、夏目漱石の『私の個人主義』を推薦しました。漱石は理系の人も好む作家です。門下生には理系の人もいます。他の人とは異なる、理系の人が引きつけられる魅力があるのではないかでしょうか。漱石自身、博学多才な人でした。海外の研究者との交流が増え、ボーダーレスになってきている今だからこそ、さまざまな分野の多読が必要だと思います。



『読ン得本々』の効用 生命環境科学域 獣医学類 中村 洋一 先生

2011年に府大の図書館の展示企画とOMUPの出版企画が合体し生協書籍部を含めた3者の共同企画として始まった『読ン得本々』の発刊は毎年継続され、早や7冊目になります。この小冊子の企画コンセプトが長持ちしているのは、執筆を依頼される教員方に学生達の活字離れに対する危機感があるからでしょうか？教員には「へーっあの先生がこんな本を推薦しているの？」と意外性もある読み物もあります。書類が電子データに置き換わっていくのは必然としても、手にとって読む書籍がなくなることはないでしょう。この小冊子も長続きして欲しいものです。



大阪府立大学所蔵の貴重書

人間社会システム科学研究科

西田 正宏 先生

大阪府立大学の貴重書庫には、大阪女子大学から引き継いだ、江戸時代以前の本が随分たくさんありますが、今は使う学生がほとんどいなくななりました。かつては、こうした古い本を「影印本」という写真版で出版してくれる専門の出版社がありました。最近は売れないためかあまり乗り気ではありません。実は、大学院生と演習で一緒に読み終えた『自讃歌注』という本があります。影印に解題、難読箇所の一覧と和歌の出典を添え、可能ならば、翻刻と簡単な注も付して出版できるといいと考えています。大学の資料の公開にもなりますし、院生の成果の発表にもなります。OMUPならば可能かもしれません。



学生へのメッセージ

生命環境科学域 獣医学類

山崎 伸二 先生

高校までは、答えのある問題に対して如何に回答するかを学んで来たと思います。

しかし、社会に出ると答えのない問題がほとんどです。大学では、予想外の事態に出くわした時に、その本質は何かを考える力を養って下さい。そのためにも多くの本を読み、多くの人と意見を交わし皆さんの感性を高めて下さい。世界30カ国以上を訪問しましたが、日本ほど素晴らしい国はありません。この素晴らしい日本を末永く継続できるよう一緒に頑張りましょう！

「脱知性時代」、「反知性主義」、「ポピュリズム」の飛び交う中で読む

理事長 足立 泰二

OMUPニュースレター 34号の巻頭「2017年の新春に想う」に書いた小文では、かなり荒っぽい表現であった。その後の政情・世情も鑑み、関連すると思われる書籍を数冊読んだので、その書評を試みたものである。最近、「紙媒体のメディア」が還ってきてある中で、著者の主張や評価を、じっくり読みながら考える楽しさを満喫している。

1. 森本あんり「反知性主義 アメリカが生んだ「熱病」の正体」

新潮社 (新潮選書) 2015. ISBN978-4-10-603764-1 ¥1300+税



今次のアメリカ大統領選が始まる前、すでに「反知性主義」が巷間聞かれ出し、たとえば、①若者は本を読まなくなったりとか、②テレビの低俗な娯楽番組国民の頭脳が毒されているとか、③大学はレジャーランド化して単なる就職予備校に成りさがったとか、④国民を無知蒙昧の状態にとどめておく、「愚民政策」の陰謀だ、などという人までいる中で、著者は反知性主義がアメリカのキリスト教を背景に生まれたことを、こと細やかに分析している。とくに、反知性主義はハーバード大学を筆頭にエリート教育、極端な知性主義の土壤、社会、教養主義などに起因することを説いた上で、宗教的、信仰復興運動や最近のメディアの活用による大統領選との関係性にまで言及している。さらには、アメリカ的な「自然」と知性との融合にエマソンの反知性主義を挙げ、ヨーロッパ的な知性に抗するものとして取り上げ、反知性主義を育む平等の理念にも論及している。またその推進は、巨大産業化、信仰とビジネスの融合を挙げている。いわば、こんどのアメリカ大統領選の予言にもなったとして、選挙後に書店ではベストセラーになっているとか。私は19世紀後半のドイツの産業化が進み、啓蒙思想が若者の自然志向に向かう中で、政治的に巧みに利用したヒットラーの独裁政治が取り返しのつかない人類史を導いたことを連想してしまった。知性とは何かを考える上で大いに参考になった。

2. 平野啓一郎「自由のこれから」

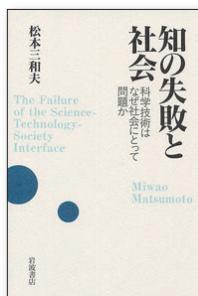
ベスト新書 2017. ISBN978-4-584-12554-0 ¥815+税



昨今では当たり前のように言われる市場原理主義、いわば競争の自由とまで言われている、何が自由で、何に対して、何からなのか、著者と同年代の3人（デザインエンジニア、法学者、生命科学者）の知性派との自由をめぐる対談集である。私は紙媒体でゆっくり読み、考える事は慣れているつもりであるが、この種の対談を文章にした書籍は対談時の状況を必ずしも再現していないのか、論旨が一貫していないことが多い。著者自身の主張は対談によって深められもするし、共感は得られようが、知性を深めることには寄与しない。それこそ、臨場感を持ったCDなりDVDを一枚入れ込んだ書籍にすべきだと印象が強い。書評というよりは最近の知の情報発信自体がその場限りの刹那的と感じるのは私一人だろうか？

3. 松本三和夫「知の失敗と社会 科学技術はなぜ社会にとって問題か」

岩波書店 2002. ¥3500+税



この本は新刊本ではない。私的なことをいうと、自然科学の一端を進めていた現役時代に日々考えていた、いわばディレンマに対しての問題点を整理している本だ。当時若者、今や大御所の著書を、偶々自分の古い書架に見出し、読み返したら、現代にも通じる立派な知性の蓄積をみた。紙媒体の良さ、古典ともみなしてよいのではないか。因みにIT技術のおかげで、古本も要因入手できる時代になつたことを喜ぶべきだろう。

知の失敗事例として天災と人災のあいだの失敗、科学技術政策のディレンマについて、かなりの紙数を割いたあと、知の失敗克服のための知として、数々の問題を取り上げ、考察している。結論的には「自己言及・自己組織型の提言」にまで論及している。脱知性時代にあって、知の失敗を考察するとしても、反知性主義に走ることなく、もっと人類の近未来的展望をしたいと思った。個々の事例のとらえ方は、必ずしも同一見解でなくとも、人類の歴史認識と理性判断を誤りたくないものと意を強くした書籍である。

第34回OMUPサロンの報告

第34回OMUPサロンが2017年4月28日(金)午後2時～4時に、ジュンク堂書店難波店3階特設会場において開催されました。演者は、本年にOMUPから出版された『デージーワールドと地球システム—The Earth Systemの抄訳と編著者のノートから—』の著者である能田成熊本大学・京都産業大学名誉教授と、能田氏の京都大学嵐山学術登山隊の同僚でもあった乙藤洋一郎神戸大学名誉教授で、「デージーワールドと地球システム」について対談形式で話してくださいました。

能田氏は、これまでおもに東北地方の火山岩の同位体元素を分析し、その結果を元に、プレートテクトニクスという学説を用いて日本海形成の謎に迫り、その成果を『日本海はどう出来たか』(ナカニシヤ出版、2008年)などとして発表してこられた地球科学者です。「日本海はどう出来たか」という問題はそれ自体、とても興味深い問題ですが、その問題に長年取り組んでいるうちに、能田氏は現在の地球環境に危惧を持たれるようになったようです。地球はこれまで誕生以来46億年もの間変動してきたのですが、今残されている証拠とともに地球の変動をたどってこられた地球科学者の能田氏には、現在の地球の多くの変動が、人類の活動を原因とするものであり、地球環境へのその影響が従来とは比較にならないという意味において、これまでの変動とは異質なものに映るからです。能田氏は現在の地球環境に対する危惧を、ジャムズ・ラブロックの「デージーワールド」という仮想的世界を用いて表現しようとしておられるようです。このサロンでは、能田氏の友人で、京都大学嵐山学術登山隊における同僚であった乙藤洋一郎神戸大学名誉教授が、能田氏に巧みに質問を投げかけられ、能田氏に『デージーワールドと地球システム』の内容、その本に込められた能田氏自身の思いを語ってもらっておられました。

サロンには、能田氏の学生時代からの友人が多数参加しておられ、旧交を温めておられたほか、サロンの内容に关心を持って参加し、的確な質問をしておられた一般の方もあり、この本の内容に対する関心の広がりを感じさせてくれた会でした。

(文責 中村 治)



OMUPサロン当日の様子

大阪府立大学図書館にOMUPコーナー設置

中百舌鳥キャンパス学術情報センター総合図書1階にOMUPコーナーができました。是非一度お立ち寄り下さいますよう御案内致します。OMUPの全出版物については、A14棟221号室で見本をご覧いただけます。



大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているNPO法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行が受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話：072-251-6533 フax: 072-254-9539

e-mail: omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL: <http://www.omup.jp/>

入会金：一口一万円（終身会費）

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

今夏は殊のほか、暑さきびしい日々でした。皆様お変わりございませんでしょうか。

6月末には総会を無事に終えることができました。皆様のご協力とご支援のお蔭であると心から感謝申し上げます。これからも書籍出版をより身近に感じていただけるよう鋭意努力してまいる所存です。引き続きどうぞよろしくお願ひ致します。

(文責 児玉倫子)